

「3本の矢」による次世代を担うふるさと学芸員の養成事業 ～交流と学びを通じて養成するふるさと学芸員～

邑南町口羽公民館

1. 口羽地区の概要

(1) 地区の様子と人口

口羽地区は島根県の中部、邑南町の南部に位置し、江の川中流域にまたがり、広島県作木町と隣接する山間の自然豊かな町である。地区人口は724人、357世帯と高齢化が高い地区でもある。

(2) 地区の学校の状況

口羽地区の学校は口羽保育所と口羽小学校があり、水泳とソフトテニスで盛んで地域のスポーツ少年団に児童たちが所属し取り組んでいる。

(3) 地区の史跡と名物

口羽地区の史跡として旧琵琶甲城を居城とした武将口羽通良がある。毛利元就の御4人衆として山陰地方の制圧に大きく貢献した。また、平成30年3月末で廃線となるJR三江線は島根県江津市から広島県三次市を繋ぐ108キロの沿線で人物の輸送で地域振興に貢献した。

2. 事業の趣旨

(1) 後世に語り継ぐふるさと学芸員の養成

口羽地区の史跡文化を伝える人の高齢化が進み、後世に伝える後継者の育成が課題となっている。口羽公民館では今年度より、段階的に3つの学びと交流を中心とした養成プログラムを実施し、地域の史跡文化に精通する高い知識を身につけたふるさと学芸員の養成を図る。

(2) ふるさと学芸員の役割と地域づくり

本来、ふるさと学芸員が目指す姿とは学びと交流を通じて、地域の大人や子ども達に地元の史跡文化の大切さを伝え、きっかけとして史跡文化を活用とした地域づくりを行うための意欲向上を図ることである。このような地域住民に対して地域づくりの原動力となる「地域力向上

に通ずる人」として育成していくためには、今年度ふるさと学芸員に必要な知識やマナーを中心に習得させ、ふるさと学芸員の仕事を実践的に経験させる。

3. 具体的な取組内容

(1) 3本の矢による養成プログラムの概要

口羽公民館はふるさと学芸員に興味のある地域の方を募集したところ2名の応募があり、地元史跡文化に関する団体、はすみ史学会や江の川鉄道応援団の協力を得て、口羽通良氏やJR三江線の史跡文化を中心に「学び」、「交流」、「実践」の3つのステージを柱とした養成プログラムを策定し、実践を踏まえ、ふるさと学芸員を養成した。

(2) 取り組んだ養成プログラムの内容

ア. 学びの矢 (知識習得の場)

町内外からの講師を招き、ふるさと学芸員に必要な知識やマナーを習得させる。

(ア) 地元史跡知識習得講座

地元はすみ史学会から講師を招き、ふるさと学芸員を対象に口羽地区の武将口羽通良氏の歴史学習会を開催し、基礎的な知識やマナーを学んだ。

(イ) 町内外史学会との交流事業

邑南町と広島市白木町両町の史跡文化の意見交換の場とし、ふるさと学芸員の繋がりを深めることを目的として、広島市白木町の史学会50名が羽須美地域を訪れた。口羽通良の菩提寺宗林寺やJR三江線宇都井駅などを地元史楽会とふるさと学芸員が案内し解説した。

イ. 交流の矢 (体験の場)

ふるさと学芸員が口羽公民館と協働し町内外の史跡イベントを企画運営する。

(ア) 口羽通良の史跡交流研修会

ふるさと学芸員の実践的な情報発信や意欲向上を養うため、口羽氏に縁のある広島市白木町

と連携して、ふるさと学芸員自ら企画運営した史跡交流イベントを実施した。両町あわせて250人の参加があり、両町の史跡を体感し交流を深めた。



「口羽通良史跡交流研修会時講演会の様子」

(イ) 三江線思い出企画展

地域住民が地域とともに歩んだ三江線の歴史、三江線がもたらした功績を知り、地域づくりに参画するきっかけづくりを目的として、ふるさと学芸員が企画展を企画開催した。

4 評価と成果

(1) 評価

ア. 事業のアンケート結果

「口羽通良の史跡交流研修会」や「三江線思い出企画展」の参加者からアンケートを実施したところ、とても満足をされ様子で、ふるさと学芸員の企画運営した交流事業がきっかけで、地域の史跡文化を学習しふるさとの良さを知る機会となった。ふるさと学芸員は「ふるさとの良さを人に伝える」役割について認識し体験できたことが伺える。

イ. ふるさと学芸員の振り返り

(ア) 他の地域の方や学芸員との交流を通じて、ふるさと学芸員の伝える魅力、伝える達成感を実感できた。

(イ) 地域のふるさと学芸員の史跡文化に関する知識を習得するなかで後世に伝えていく必要性を認識できた。

(ウ)ふるさとの良さを伝えて行くためには史跡文化に関する学習会を定期開催し、資料等を充実することが大切であると感じた。

(2) 成果

ア. ふるさと学芸員が企画立案をした事業により役割や仕事に興味を持ち、伝える達成感を認識し、ふるさと学芸員の仕事に意欲向上に繋がった。

イ. ふるさと学芸員の地域の史跡文化を伝える手法を学び、地域住民に対する史跡学習やふるさと教育の必要性を理解し、実施に向けての基礎づくりができた。

ウ. さらにこの学習等の開催により多くの方が参加することで、地域の史跡文化を再認識し、地域づくりを促すきっかけとなった。

5. 今後の課題と見通し

(1) 課題

一過性の交流ではなく、ふるさと学芸員の対話によるおもてなしの交流を実施することが課題である。主催者側の一方的な説明ではなく、対話により、受講された方々がその史跡にどのような感想を持たれたかを聞き取り、そのことについて説明をする。これによりお互いの理解が深まるメリットがある。さらに、説明資料の充実し地元の史学について補足資料等を用いればより史跡の内容が理解できる。

(2) 見通し

ア. 実践の矢

平成30年より、成果の場としてふるさと学芸員が地域内で学習交流を提供し「ひとつづくり」を行い、地域内外での交流を深めながら、地域資源の情報を発信する。

イ. 具体的内容

(ア) 公民館・ふるさと学芸員協働による地域の史跡文化案内マップや地域教科書を作成し、史跡学習会やふるさと教育に活用する。

(イ) ふるさと学芸員の活躍の場として、史跡学習・ふるさと教育を定期的に開催する。公民館に来館されない地域住民に対し、地域の史跡文化を映像化した資料を用い、移動公民館として地域や学校に出向いて開催する。

(文責：口羽公民館 主事 小笠原秀彦)